

耕畜連携に思うこと



社団法人大日本農会会長
武政 邦夫

昨年12月、私ども大日本農会は、耕畜連携をテーマとして「先進農家を困む懇談会」を開催しました。この懇談会は、当会の農事功績表彰受賞農家や天皇杯受賞農家、著名な農業法人などにご参集いただき、毎回、特定のテーマについて学識者と意見を交換していただくもので、昨年度から年2回開催しております。

今年度第1回目のテーマとして取り上げたのは、耕畜連携が耕種農家にとっても大変重要な課題でありながらなかなか進んでいない背景を我々なりに探り、加速していく方策を見出していきたいとの考えからでした。米沢郷、高堆肥センター、国富町、JALもつけ栃木トマト部会、当会農事功績表彰受賞畜産農家にお集まりいただいた会合は、堆肥の質-具体的な肥効パターン-を把握することの必要性、外来雑草種子の問題、肥育時における飼料用稲の給餌方法等活発な議論が行なわれ、大変有益であったと思っています。

我が国農業が、生産性向上を追求する過程において、耕種、畜産が互いに独立して発展する方向を選択した背景には、飼料価格という問題に加えて化学肥料の普及、それを支えたいわば無機質な土壌観等もあったように思います。また、互いに分離して発展したことで得られたものも大きかったと言えるでしょう。

しかし今日、その方向は限界になっています。その意味で、耕畜連携は、我が国農業にとって大きな課題です。

耕畜分離、食農分離から生じている問題に対処するには、耕畜連携を中核とする農業内の循環を改めて構築し、それに都市と農村の間の循環を適切に組み合わせていくことが基本的な流れであると思います。家畜排せつ物法の完全施行を初めとして、その構築が急がれていることは言うまでもありません。

耕種サイドとしても、耕畜連携を我が国農業の骨格として組み込んでいくための本格的な取り組みが求められていると考えます。例えば、耕種農家の堆肥ニーズに的確に対応していくために必要な肥効パターンの把握とその活用をどのように進めるのか。熱帯ではなく、温暖湿潤気候帯にある我が国農地における土壌有機物の役割について、土壌関係の学識者と作物関係の学識者の間に認識の差があるように思われますが、それをどのように整理していくのか。土壌による地球温暖化問題への貢献といった異なる角度からの視点をどのように考えるのか。

これらはいずれも「我が国の地力如何」という問題につながります。そして、遠回りのようであっても、この問題をきちんと把握することが、耕畜連携の全面的な展開を図る上で不可欠であると考えます。

昨年、本会の農芸委員会において、地力問題の検討が必要とのご指摘をいただきました。目下、そのための勉強を進めていますが、その過程で浮上したのは、従来は地力の問題とされていた事柄が本当に地力の問題であるのかどうかという疑問です。地力の問題とは限定せず、我が国農業の現場に現在生じている様々な現象、あるいは、これまでの考え方では説明しにくいような、注目される現象を関係者から予断なしに教えていただき、検討していくつもりです。

そのような問題も踏まえつつ、耕畜連携?農業内循環?を骨格とする我が国の農業とはいかなるものであるべきか。これまでに開催した農業技術研究会および環境保全型農業研究会の成果も踏まえ、21世紀における農業のあり方を探る新たな研究会を年度内には立ち上げ、広く関係各位のご意見を伺いながら検討していきたいと考えているところです。